

	おざき としろう
氏 名	尾崎 利郎
学 位	博 士 (医学)
学位記番号	新大院博(医)第207号
学位授与の日付	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
博士論文名	Dynamic computed tomography findings of malignant intraductal papillary mucinous tumor compared with invasive ductal adenocarcinoma (画像上充実部分を有する悪性 IPMT の Dynamic CT 所見-通常型膵管癌との比較)
論文審査委員	主査 教授 畠山 勝 義 副査 教授 笹井 啓 資 副査 教授 味岡 洋 一

博士論文の要旨

目的

膵管内乳頭粘液性腫瘍(以下 IPMT) の拡張膵管内に 3-5 mm 程度以上の壁在結節が認められる場合は、癌の可能性が高く切除の適応とされる。IPMT の拡張膵管内の大部分を壁在結節が占拠した場合、通常の浸潤性膵管癌との画像診断上鑑別に苦慮することが多い。本研究では両者の鑑別を行うために、大きな壁在結節を持った IPMT と浸潤性膵管癌との差異を dynamic CT を用いて検討した。

方法

1999 年から 2004 年までの間に切除された膵腫瘍の内、以下の全ての条件を満たした症例を対象とした。(a)術前に dynamic CT が施行されている、(b)CT が 5 mm 以下のスライス厚で撮像されている、(c)DICOM データが残っている、(d)IPMT の場合は壁在結節が 10 mm 以上、浸潤性膵管癌の場合は腫瘍径が 10 mm 以上。以上の条件を満たした症例は IPMT 6 例(男 4、女 2、70.0±1.5 歳 (平均±SD))、浸潤性膵管癌 9 例(男 5、女 4、66.6±9.5 歳)であった。

IPMT については、病理医が腫瘍内部の構造を組織学的に評価しマッピングを行った。2 名の放射線科画像診断専門医が IPMT の壁在結節と浸潤性膵管癌に関心領域(ROI)を設定し、dynamic CT の造影前、造影早期相、造影後期相 における CT 値を測定した。またそれぞれの時相において、腫瘍の影響を受けていない膵実質の CT 値も測定した。

IPMT、浸潤性膵管癌それぞれにおいて造影早期相と後期相における腫瘍の濃度差を一標本 *t* 検定を用いて検討した。腫瘍と膵実質の濃度差を IPMT と浸潤性膵管癌の間で、二標本 *t* 検定を用いて検討した。